

# 大聖寺の九月四日の梨市と家康の戦勝祈願

加藤 幸一

毎年梨市が行われる日に実施される大聖寺の「大会式」(重きを置いた法会)は、家康が大聖寺に立ち寄って戦勝祈願をした日と深く関係していると思われる。

なぜ「大会式」という最重要視された大祭を九月四日にしたのであろうか。必ず何か重大な理由があったはずである。おそらくその理由は、大聖寺と縁が深かった家康がここに来た日は「八月四日」との言い伝えがあったからであろう。その後、新暦が使われるようになってから、旧暦の秋八月四日の大会式を一ヶ月遅れの新暦の秋九月四日にしたと思われる。つまり家康が大聖寺に立ち寄って戦勝祈願した日は、江戸時代以来、旧暦の秋八月四日とされ、この日を記念して行われたのが「大会式」であったと思うのである。

「関ヶ原の戦い」があったのは、慶長五年(一九〇〇)の九月十五日のことである。当時の暦では秋の終わり頃である。

会津の上杉討伐のため野州小山にまで出陣していた家康は、七月二十四日に江戸からの情報として「石田三成が近江で挙兵した」との便りを聞く。そこで家康は八月四日の早朝に小山を発った。そして翌五日に江戸に到着したと思われる。大聖寺所蔵の「武州大相模不動明王瑞像記」によると、家康の兵は小山から江戸に引き返す途中で急にひどい大雨に会い、大聖寺(大相模不動尊)に立ち寄ったとされている。その立ち寄った日は、秋八月四日と推定できる。そしてそこで石田三成を成敗するための戦勝祈願を行う。

家康は自分の刀を大聖寺に奉納した。住職の定伝はその刀を護摩壇に立て、護摩を炊いて本尊の不動明王の前で戦勝祈願のための呪文を唱えた。そして「とても鋭い刀剣よ、魔軍を打ち破れ」などと訴えた。するとその刀が西に倒れ、武器が触れ合う音がして、鎧を着けた武士が競い走り去るようであった。戦闘の様子と石田方の賊の退散の様子を表している。以上が「武州大相模不動明王瑞像記」に書かれた内容である。西は西軍の石田方をさす。家康方は東軍である。その後、おそらく大聖寺で体を休め、一泊したことになるのであろう。こうして家康は、前々から家康とつながりのある住職定伝の住む大聖寺に立ち寄り、戦勝祈願をしたのである。家康にとっての八月四日は戦勝祈願で石田方を倒すとお告げが出た記念すべき日であったといえる。

さて大聖寺では毎年九月四日(江戸時代は秋の八月四日)に護摩祈祷などを行う大会式が催され、一方縁日もたち、かつては多くの露店で大変賑わったのである。この露店がたつ市を「梨市」と呼んだ。以前は千葉県などからの露店商もきて梨も大いに販売されていたのである。今ではこの日に「カラオケ大会」も実施されている。翌日の五日は、かつては地元若者たちによって相撲大会を催す習わしがあった。相撲は戦後になっても何年か続けられたが、いつしかすたれ今は催されていない。